

こどものスマホ・ゲーム依存

樋口 進

独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター

2017年実施の全国の中高生約6.4万人に対する調査によると、ネット依存の疑われる学生の推計数は93万人に上り、2012年実施の実態調査に比べて1.8倍に増えていた。若者のゲーム依存に関する実態は明らかになっていなかったが、2019年1-3月に最初の全国規模の調査が実施されたので、発表当日にはその概要を紹介できる予定である。

国際疾病分類（ICD）は現在改定が進行しており、間もなくICD-11が採択される予定である。当初のICD-11草稿には、ネット依存は収載されていなかった。この状況を覆すために、我々はWHOと緊密に協力して、ICD-11の最新草稿にゲーム障害（gaming disorder）の定義を収載するまでにこぎつけた。その他のネットアプリに関する依存は、医学的エビデンス不足のため、今回の収載は見送られた。

私どもは、日本で最初のネット依存専門外来を2011年に開いた。訪れる患者は若者が多く、未成年者が全体の2/3を占めている（男女比、7-8:1）。全体の90%以上は主にオンラインゲームに依存している。最近、特にスマホゲームの割合が急速に増えている。ゲーム依存の健康・社会生活などへの影響は大きく、遅刻、欠席、成績低下、親への暴言・暴力、昼夜逆転、引きこもりなどが多くの者に見られる。合併精神障害を有する患者も一定の割合で認められ、注意欠如多動性障害、自閉症スペクトラム障害、社交不安などの合併頻度が高い。

2018年5月に実施した全国の子どもの精神保健福祉センターに対する調査では、ネット依存関係の相談件数が急速に増加していた。一方で、ネット依存の専門的治療を行っている医療機関は極めて限られている。この治療ニーズに対応できる相談・治療機関の体制整備が急務となっている。

当センターは、現在、外来治療、外来カウンセリング、NIPと呼ばれるこども・成人向けのデイケア、入院治療、家族会・ワークショップ、治療キャンプなどを行っている。また、2013年より、教育者、医療者向けの人材育成研修や公開啓発セミナーなどを行っている。発表当日は、スマホ・ゲーム依存の、疫学、診断、症状、治療、予防対策等の現状を報告させていただく。